

ピアノ基礎技法

～ペダルの使い方・上級～

The Basic Piano Techniques: Pedaling, High Level

(2006年3月31日受理)

大山 佐知子

Sachiko Oyama

Key words : ペダルの深さ

When a child is used to pedaling, the next step is to be conscious of the depth of pedaling. It is the most important element which will decide the balance of the whole sound system.

ペダルが静かに踏めるようになったら、次の段階で、ペダルを踏む深さを意識すると良い。ペダルの踏み方は、演奏全体の響きのバランスを最後に決定する、最も大切なものである。

はじめに

ペダルは、特に耳で確認しながら身につけることが大切である。

初級の段階から、注意深く、弾いた「音」に対してペダルを「踏む」瞬間と、「あげる」瞬間を聞いて、確実に処理できたかを確認することができるようにしたい。これについて、どのような準備と意識が必要であるかは、中国学園紀要 第4号に、記載した。

ほぼ確実にになった初級からのペダルは、あらゆるピアノの演奏曲目を弾けるようになった中級の段階でも、ある程度効果的に使用できるものである。しかし、ここでは、更に上級として、演奏を行うために考えるべき注意点を考慮していく。

〈ペダルの深さ〉

ペダル（今回は、右足で踏むダンパーペダルについて大半を考慮する：以降ペダルとだけ記す）は、最初に踏む軽い部分と更に踏み込むと途中から少し重い部分に分かれている。最初が軽く感じるのは、5ミリ程度の深さまでのところで、ダンパーをまだ上げていないでペダル

だけ踏んでいる状態だからである。車のアクセルなどでも遊びの部分があるが、ピアノも同じである。遊びの部分を踏んでいくと急に重く感じる位置があるが、これは、この部分から、ペダルが効き始め、ダンパーがあがり始めたという位置である。最初は、少ししか音が残らないが、そのままだんだん響きが豊かになり、底まで踏み込む前にこれ以上ダンパーが上がらない位置がある。これが最もペダルを効かせた位置である。しかし、ペダルは、もう少し深く踏み込むことができるようになっている。この底の部分にも少し遊びがあるのである。

上記は、前にも述べたことであるが、ペダルを効かせるのに、「静かに踏むこと」を初級で身につけるために、遊びの部分があるという意識は、最初に必要な注意であった。更に上達するために、この、“ペダルの効いている部分”を踏む時、「深さ」の違いにより、音がどのくらい響き、持続できるのかを注意して聞き分け、演奏の度に最適な「深さ」を、選べるように意識する必要がある。

上級の段階として詳しく述べる。

音の高さを、高めや、低め取ることを、“1/4音上げる”とか、“1/4音下げる”とか言うが、ペダル

も、“半ペダル”、“1/3ペダル”、“1/4ペダル”、“1/5ペダル”などさまざまな踏み方がある。「深さ」を変えて、響かせ方をだんだん変化させ加減していくのである。

まず、“半ペダル”から考える。

“半ペダル”は、半分位「深さ」を踏むものである。

これにより、音の伸び方が半減し、音が持続できなくなったと同時に響きが半減する。単音の伸び方が半減すれば共鳴するピアノの弦全体の響きは、半減以下に近くなる。音の伸び方を聞いて、低音の音が鳴りすぎたりした時、ペダルを半分に踏み戻せば、共鳴も急激に半減し、ペダルの加減で響きを修正することが可能になる。

“1/3ペダル”は、どのような踏み方か、考える。

“1/3ペダル”は、速い踏み換えで、少しでもはつきり響きを必要とするときに踏み、次々と連続する音に対して即座に反応することが必要な場合に特に有効である。速い速度での足の踏み換えは、高度な技術を要するが、深く踏んでいては、踏み換えに時間がかかり過ぎることは、想像が容易い。半分まで踏み込んでいては、連続音にたいして、速く換えることは難しい。ペダルが効いているという感じは、1/3位で耳にはっきり意識できるので、その位の踏み方の響きを耳でよく覚え、深く踏み過ぎないように、しかし、効き目がはっきり解るように踏むものである。

“1/4ペダル”は、どのような踏み方か、考える。

“1/4ペダル”は、特に弱音で響きを要する時に有効である。ペダルは、持続したまま多くの音を重ねて出していくと共鳴が重なり音量を増強することが容易くなるが、反対に音量を減らすことは、難しくなる。共鳴を加減するようにペダルの深さを浅くすることで、多くの音で構成された弱音の響きも音量を調整しやすくなるのである。

“1/5ペダル”は、どのような踏み方か、考える。

“1/5ペダル”は、ほとんど踏んでいるかどうか分からないくらいのペダルである。ピアノ全体が湿気を含みすぎた時、一音だけ残る様な状態がおこることがあるがほとんどそれに近い踏みかたである。バッハのシンフォニアなどで、内声や上下の旋律をレガートに演奏するために、一つの音だけ伸ばして次の音につなげたらすぐ離すという、メロディーをぶつ切れにしないための、

細かいペダルを必要とする場合がある。同じ指を使わなければいけないため止むを得ず切れる音や、跳躍でどうしてもつなげられない音の場合に指の代わりにペダルで音を伸ばすのである。ほとんどペダルを踏んでいるかどうか分からない状態で切れてはいけない音と音の間だけペダルが効いているのが正解である。なぜなら、指の代わりにペダルなので、本来一番良く使われる、音の響きを要するペダルとは、全く別のものである。聞いているだけでは、おそらく誰も気が付かないうちに使っているべきなので、言うなれば“隠しペダル”である。このペダルを巧みに使うことにより、まるで手が3本あるように、バッハのシンフォニアの3つのメロディーをレガートに演奏することができるのである。

〈演奏場所のピアノの状態〉

指先でピアノに触れ、音質や音色を整えることから、足先でペダルに触れ、響きを調節することまで、ピアノに触れて、体全身の使い方を楽器の使い方に、一体化させていくことができるようになったとしよう。

そのままの状態を、演奏する場所に持っていけるだろうか？

実は、ピアノの演奏は、他にさまざまな条件を考慮して行うべきものである。なぜなら、ピアニストは通常、自分の演奏楽器のピアノを、持ち歩かない。(まれに、世界的に有名なピアニストが、飛行機で自分の愛用のピアノを必ず、演奏会場に持ち込む例はあり、その上、最善を尽くすためピアノの状態を見るのに2台用意するそうであるが、普通できないことである。これは、ホールのピアノより明らかに表現力の豊かなピアノを所有している自負があるから、できることである。) 費用的にも大変であるし、巨大であるだけに動かして状態が落ち着くまでに時間がかかるものだからである。そういうことで、ピアニストは自分の楽器を持ち歩くより、各演奏会場でその場所にあったメンテナンスを常に行っているピアノを使用して演奏会を行う。その方が、ピアノの状態としては良いという場合が多いのである。

状態が落ち着くとは、どういうことか？

低音から高音までの響きのバランスが整っており、弱音から強音までに対する音の反応が敏感な状態であると、いつでもコンサートに使用できる状態と言えよう。

色々な演奏者の弾き方により、ピアノの状態も変わってくるものであるが、特に弱音を美しく保つことは難しい。ピアノは、弦を打鍵するハンマーの綿の部分が磨り減ってくると、中くらいの音量から弱音が艶を失いやすい。いかにも硬い耳障りな音しか出さなくなる。これをメンテナンスするための、ホールに専属の調律師、または、技師の人がいれば、演奏会後に、ピアノを出来るだけ良い状態に再生させることができるのであるが、全てのホールには、望めない。演奏家により、プログラムの曲目により、ピアノの鍵盤は、一律に弾かれていないので、本来は、必ず一音ずつ全体のバランスを整え直す必要があるのである。

ピアノを人間の体の状態に例えてみる。

例えば、演奏すると言うことは、人がスポーツをすることと同じである。スポーツをするといっても、水泳をするのと、テニスをするのと、マラソンをするのでは、筋肉の使い方が違うはずである。体の消耗も使う頻度が多い場所で多くなり、それぞれに偏った使い方をしていであろう。スポーツの前にも後にも体全体のバランスを整えるため、水分補給や、筋肉をほぐす柔軟体操、栄養補給など行くと、急激な動きで故障を起こしたりすることも少なくなる。体も消耗するので、年齢を重ねると、更に日頃の状態を整えることが必要になってくるであろう。消耗の状態を常に知っていれば、そして今現在として体を常に良い状態にバランスをもどしていれば、またすぐ次の機会に無理のない範囲で力を発揮し、スポーツも持続することができるはずである。

重ねて言うが、ピアノも同じである。ピアノも生きていると考えたい。温度や湿度調節を最適に保たれた場所で、いつも状態を管理されていれば、今現在の状態が常に良ければ、いつどのようなピアニストが来ても、そのピアノとしては、最大限の反応をしてくれるはずである。しかし、別の状態ではどうだろう。演奏の前にも後にもメンテナンスもないまま次々と色々な弾かれ方をされ、色々な調律師の仕方をされると、いつも日によって違う状態にされているピアノがあるでしょう。溜まってきた偏った消耗部分を、気が付かれないまま酷使されれば、ある日突然故障を起こすだろうということは、誰でも想像できる結果である。ガソリンを補充しないまま車が走っていて突然止まるようなものである。

〈演奏場所での音を聞く耳〉

前述のように、ピアノの状態は、場所により、管理方法により、良い状態で置かれているものばかりはない。

では、良い状態で置いてあるものなら思うように弾きこなせるであろうか。

これも実は、その場所で、演奏に使うピアノの状態を数時間のリハーサルの間に見抜き、理解することが出来なければ、なかなか弾きこなせない。

演奏会場での音は、家庭のグランドピアノを置いてある部屋で聞こえる音とは、聞こえ方が違ってくる。部屋で演奏するときよりも会場で演奏する方が、響きが格段に増えるのである。空気の振動の余韻が、部屋と会場では、比べ物にならない。その場所でもよく聞いてみる以外にないのである。大きなホールでは、残音が1秒半位に設計されて建築されているのが良いホールの条件の一つであるが、普通の家の部屋で、体験できるものではない。

もちろん実際に演奏会を行って見ないと、ホールの状態も落ち着かないし、開館から数年を経てだんだん響きが良くなることもある。

結局、演奏するために、一定の基準は望めないのである。その場に行って、会場の状態の響き具合を感じながら、ピアノを弾き、更にピアノの状態を、自分で調べるしかないのである。

ここで、普段そのピアノを良く知る調律師の人の助けを借りて、少しでも自分の弾きやすい状態に、ピアノのバランスを整えてもらえると、会場の響きとピアノの響きのバランスを取りやすくなる。

ここで頼りになるのは、自分の“耳”である。

最終的に、どのような加減で演奏するかは、自分で判断するしかない。ホールでの演奏のバランス感覚は、ホールで演奏する経験を積んで初めて身に付くものである。この経験を埋めることは、急にはできないが、良いバランスを聴く耳を作っていくよう、日頃から自分の音を注意深く聴くべきである。耳を鍛えることで全体のバランスがどう変化しているかを、演奏する場所で少しでも確認できるようになるだろう。もちろん色々な場所での経験を積むことができるのが最も自然にバランス感覚が身に付く方法であるだろう。

とにかく響きを良く聴くことである。

では、響きのバランスを聴いて、どのような加減をす

ればよいのであろう。

どのような場所でも、ピアノの状態とその場所の響き具合は、さまざまである。

大ホール、中ホール、小ホール、演奏のための会場でも響きの良し悪しがあるが、ピアノの状態の良し悪しもある。ホテルの宴会場なども絨毯の上にピアノを置いてあって、響きが悪そうに思えても、部屋の空調が一定に整っていることが多いためか、意外とピアノが良く響く状態で保たれていることもある。サロンの広さのホールに異常に大きなコンサート用のピアノが置いてあるとうるさいほど響くので注意することが必要だったりする。

響きにくい場所では、無駄な抵抗を止めて出来る範囲の最大限の響きを作るしかない。

いったいこの状態を加減するのに一番役立つのは、何か？

それが、バランスを全体に変えるペダルの奏法である。響きすぎを、減らし、響きを倍増することができる。しかし、電気楽器の音量を変えるような効果は、望めない。あくまでもバランスを取る範囲である。

響く場所では、いつもよりペダルの深さを浅めにしたリ、ペダルを使う必要がなくなって完全にペダルをなしにする演奏箇所も出てくる。

反対に響かない場所では、より深いペダルの使い方を行ったり、長めに使ったり、新たに加えたりすることもあるわけである。

言うまでもなく、その場所でのペダルの奏法の判断は、自分の耳に委ねられているのである。

〈特殊なペダルの選び方〉

今まで、ダンパーペダルをその場所に最適な状態で加減し踏むことが出来れば、大きく演奏を助けることになる」と述べてきた。

実は、特殊であるが、ソフトペダルも音のバランスを作る上で、とても効果がある。

響きすぎるホールで、尚、響きすぎるピアノの状態のとき、華々しい演奏効果は、得やすいが、弱音を要する箇所を指先だけでは、作れないことがある。このような場合、演奏効果の幅を広げるためにソフトペダルを増やす場合がある。

また、止むを得ない場合の使用もある。

ピアノは、消耗品であり、消耗が進むと弱音の効果が激減すると前に述べた。新品のピアノでは、最初、ハンマーの綿の部分が柔らかく少し響きの焦点があわない感じがするものである。そのうち何年か経つと綿も最適な硬さになり最大限の響きを放つようになる。最後に、磨耗が進んで特に弱音での奏法が難しい状態になる。

このような時に、ある程度弱音を回復させることができるのが、ソフトペダルである。なぜなら、ハンマーの綿とダンパーの接触部分をずらす役割なので、磨耗の少ない部分に数ミリだけハンマーを移動させることができ、弱音の柔らかい音が回復したようになる。そうは言っても、耳障りな音を避けて、ペダルと手の技術を駆使して中くらいの音を作るといった、演奏としては、本来必要のない労力を使ってピアノに接し、ピアノのバランスを取っているだけの効果である。この操作による演奏の状態の幅は、望めない。ピアノの修理をしながら演奏しているようなものである。できれば、ホールのピアノがここまで磨耗する前に、新しいピアノを購入するか、ハンマーやダンパーの交換などメンテナンスを行ってほしいものである。

〈フレーズに対するペダルの踏み方〉

ペダルの奏法を身に付け、演奏する場所の響きの状態も考慮できたとする。演奏全体のバランスは、この意識でずいぶん良い状態かどうかを計れることと思う。

今回、最初に、ペダルの深さを意識して踏むということ述べた。

ここで最後に、ペダルの切り方にも細心の注意を払うことが更に大切であるということ述べたい。

深さを意識して行うさまさまのペダルの踏み方が、演奏曲目に対しても、場所や、ピアノに対しても選べるようになったら、最後に、音を切るときのペダルの上げ方も細心の注意を払って行うことにより、フレーズ感を決定し、その響きの聞かせ方の変化により、表現の幅を細かく多彩に支えることができると考えるのである。

ペダルの使用を大きく外面に向けての意識と、内面に向けての意識に分けて考える必要があるということである。

まず、外部の状況を判断し、演奏の音量の最大幅、最小

幅の縦の響きのバランスを決定したら、今度は、横の響きにあたる演奏の流れを作るためのバランスを考える必要があるのである。これが、演奏内部の状況を考えることであり、これをどこまで表現できるかは、ペダルの細心の注意で良い響きのホールほど倍増する効果を得ることができるのである。

では、演奏内部の意識をどのようにペダルで支えるのか。

これは演奏する上で、手で行うフレーズ感に加え、ペダルの加減も細かく操作し、補助するというものである。演奏表現は、演奏会で多くの人に演奏者のイメージをはっきり伝えられる様、より効果的に行わなければならない。ペダルで響かされたフレーズが、次のフレーズに入る時、ペダルの踏み換えは、とてもスムーズでなければならない。このフレーズのつなぎ方まで熟慮し、細心の注意を払うことが大切なのである。

ほとんど次のフレーズに入る直前まで切れ目なくペダルを踏み、音が切れたと思ったら、即座に踏み込んで長いフレーズを作るもの、はっきりと切って、短いフレーズを強調するもの、さまざまである。また、どの程度の余韻にするかによって、響きが長く共鳴が多いほど効果が倍増するので、間の取り方も変わってくる。このようなフレーズ感を持って、ペダルを処理すれば、音の段落、色彩が浮かび上がってくるはずなのである。

音の余韻は、足でペダルの深さを意識し、最後にダンパーが降りてピアノの弦をつかみ込み、消音するまでを良く聞いて加減することで随分違ってくる。余韻が切れすぎになりそうであれば、このダンパーが降りた直後に数ミリ踏み込む、隠しペダルを一瞬すれば、オーケストラが音を止めたような柔らかな余韻を伴った切り方に行うことができる。2段階に上げるような足の動作をフレーズの響きの中に要するが、柔らかい余韻を作り出すには、効果的なペダルの使用法である。

他にもクレッシェンドや、デクレッシェンドをペダルで補助することが有効である。

フレーズの中でクレッシェンド的にだんだん響きを加えたいければ、ペダルを徐々に、もっとも効果的に聞こえるまで深さを加えて行き、音量の幅を加えることができる。反対に、フレーズの響きをどの程度速くデクレッシェンドで減らすかも、ペダルの深さを浅くするのをどのくらい

の速さで行い、音を消音していくかによって、急激な響きの変化も、緩やかな響きの変化も多彩に表現することを可能にしてくれる。

響くホールでは、ペダルを減らすことがあると述べたが、これはつまり、手の技術でホールの響きを借りて音を切る表現の幅が増えたということである。更に細心のペダルの使用をフレーズ毎につなげ、クライマックスでは、ペダルを最も深く、最も長く、踏み込んだとしよう。これにホールの響きの共鳴が加速的に加わった時、更に予想以上の音量表現の幅も可能になる。その中で演奏者は、最適なバランスを耳で計り、刻一刻と即興的に響きを選んで演奏していくことになるのである。

響かないホールでは、ペダルを増やすことがあると述べたが、これはつまり、手の技術だけでは、音がぶつ切れに聞こえるので表現の幅が狭くなっているということである。更にペダルを最大限に使用しても、ホールの響き具合のバランスが悪いため、ほとんど響き加わらないので、音量表現の幅も狭くなる。余韻がない場合、響きがホールに対して、物足りないものになってしまう。響かないホールでは、ピアノの効果を最大限に扱えても、響きの効果として観客側では、不満が残ることは避けられないのである。どうも演奏が聞こえにくい状態とか、遠くで鳴っている感じの状態が終わってしまう。力んで響かせようとしても演奏のバランスを崩すだけなので、音量の倍増はあきらめて、ペダルの響きのバランスだけは、フレーズ感を失わせないように使用していくことに専念すべきなのである。

おわりに

初心者の段階で、ピアノのペダルを音と一体化して、静かに踏めるようになったら、発表会などで様々のホールでの演奏経験を積むことが必要になってくる。小さな部屋とホールでは、響きが違うという経験は、想像ではわからない。やはり可能な限り多くの機会を持ち、幅広い響きの感覚の記憶を無意識に溜めて、身に付けていった方がよい。

上級者としては、一人で練習するだけでは、演奏しているとは言えない。演奏とは、聴く人が一人でもいることで、自分の音の聴き方、演奏の仕方が変化するもので

あり、誰かに向かって発信している意識を持つことであると考える。演奏を未完成のものにしないために、必ず、発表の場を持つことが大切になってくる。その上で、自分の演奏に対する自己評価を、他人の外部の耳で聴かれ判断される評価と比べ、差がありすぎないか考える機会が必要である。

この経験を積む際に、演奏の完成として、忘れてならないのがペダルにおけるバランスの取り方の習得である。意識すれば少しずつ記憶に残っていくが、意識しなければ全く身に付かない。ピアノと一体化したペダルが踏めるようになっていなければ、到底わからない段階である。ある程度発表会の他にコンクール等で場を踏んでも、色々なホールでの経験を積む機会は、年に数回程度しかない。これで演奏家の年何十回もの演奏で得る感覚には、届くわけがない。

とにかく、ペダルを最大限に使いこなせる様、耳を鍛えることである。

どんなに手の技術を積んでも、ペダルの扱い一つで、効果を半減するどころか、全くの雑音にしてしまうことが現実に起こり易いのである。ペダルだけの経験不足以外には、理由はないのである。

ペダルを演奏の最終段階でもっとも効果的に使えるように、身体全体を指先から足先まで、ピアノの音と一体化させることがまず大切である。

その上で、演奏を成功に導ける様に、あらゆるピアノの状態を知り、設置場所の状態を知り、総合的にペダルを最終決定することができる耳を持つことが、更に重要であると考えられる。